修学旅行の歴史と変遷

高橋　真優

＜目次＞

はじめに

第１章　始まりから戦争まで
　第１節　修学旅行の始まり
　第２節　修学旅行の普及
　第３章　軍行から物見遊山へ
　第４章　戦争の影響

第２章　戦後から現代まで
　第１節　戦後の再開
　第２節　修学旅行の進化
　第３節　海外への修学旅行の登場
　第４節　修学旅行の今

おわりに

参考文献
参考サイト

はじめに

私は今回「修学旅行」というテーマについて研究しようと考えた。このテーマを取り上げた理由は、私が旅館でアルバイトをしており、そこで旅行について興味を持ったからだ。旅行と言っても種類は多種多様である。伊勢参りやお遍路は僧侶が修業や伝道のため、一般人は社寺に参拝するために行い、慰安旅行や社員旅行、新婚旅行は娯楽として行う旅行である。温泉地で治療をするための湯治も旅行に分類されるだろう。この多種多様ある中でも「修学旅行」に焦点を当てていくことにした。誰しも必ずと言っていいほど経験したことのある修学旅行だがそれぞれの経験に大きな差があると感じたからだ。

私は山形県内の私立高校に通っていたが、高校二年生の修学旅行は京都・奈良・大阪・広島の近畿地方だった。理由としては当時の学校長が「海外に目を向けるより先に、日本の事をしっかり知らなくてはならない」という考えを持っていたからだ。しかし、同じゼミ生で山形県内の私立高校出身者はアメリカのロサンゼルス、岩手県一関出身の公立高校出身者は沖縄だったという。このように私立校や公立校、地域などにより旅行先も日程も目的も大きく異なっている。なぜ違いが生まれるのか、いつから現代のような海外への修学旅行が始まったのか、そもそもいつから始まったものなのかを明らかにしていきたい。

本論文では、修学旅行の誕生から現在に至るまでの歴史をまとめていきたい。メディアセンター所蔵の文献や修学旅行について記載されているウェブサイト、ゼミ生・友人への聞き取り等を参考にする。

第 1 章では、修学旅行のはじまりから戦争までを説明していく。修学旅行の誕生した背景、どのように全国に普及したのか、実施する内容の変化等を明らかにしていきたい。

第 2 章では、修学旅行の戦後から現代までを説明していく。戦後どのような形で再開されたか、現代の修学旅行はどのようなものか等を明らかにしていきたい。

第１章　修学旅行のはじまりから戦争まで

第１節　修学旅行のはじまり

日本ではどのような出来事が修学旅行のはじまりであるのかをみていく。まず、本論文に出てくる名称から整理していく。明治時代では、小学校や中学校は名称が今日と異なっており、尋常小学校や高等小学校と呼ばれていた。ここでは、以前の名称のうち本論に登場するもののみを解説していく。図 1 は 1892（明治 25）年の学校系統図である。この図 1 は修学旅行が登場した 1887（明治 20）年に最も近く、本論に登場する学校区分が掲載されているため、この図を使用した。

尋常小学校	1886 年（明治 19）小学校令により設置され，満六歳以上の児童に初等普通教育を施した義務制の小学校。期間は最初四年，1907 年から六年。41 年（昭和 16）国民学校令により国民学校初等科と改称された。[1] 現在では小学校 1 年生～4 年生に、1907（明治 40）年以降では小学校 1～6 年生にあたる。
高等小学校	旧制で，尋常小学校卒業者にさらに程度の高い初等教育を施した学校。修業年限は初め四年，のち二年。義務制ではない。高等科。[2] 現在では小学校 5 年生、6 年生にあたる。
尋常中学校	旧制中学校（きゅうせいちゅうがっこう）とも呼ばれる。学校教育法が施行される前の日本で、男子に対して中等教育（普通教育）を行っていた学校の 1 つである。[3] 現在では中学校 1 年生～高校 2 年生にあたる。
高等中学校	尋常中学校を卒業した男子に高等普通教育を施す学校。修業年限は 2

[1] 出典：Weblio 辞書　「尋常小学校」
http://www.weblio.jp/content/%E5%B0%8B%E5%B8%B8%E5%B0%8F%E5%AD%A6%E6%A0%A1　2015.1.9
[2] 出典：Weblio 辞書　「高等小学校」
http://www.weblio.jp/content/%E9%AB%98%E7%AD%89%E5%B0%8F%E5%AD%A6%E6%A0%A1　2015.1.9
[3] 出典：Weblio 辞書　「尋常中学校」
http://www.weblio.jp/content/%E6%97%A7%E5%88%B6%E4%B8%AD%E5%AD%A6%E6%A0%A1　2015.1.9

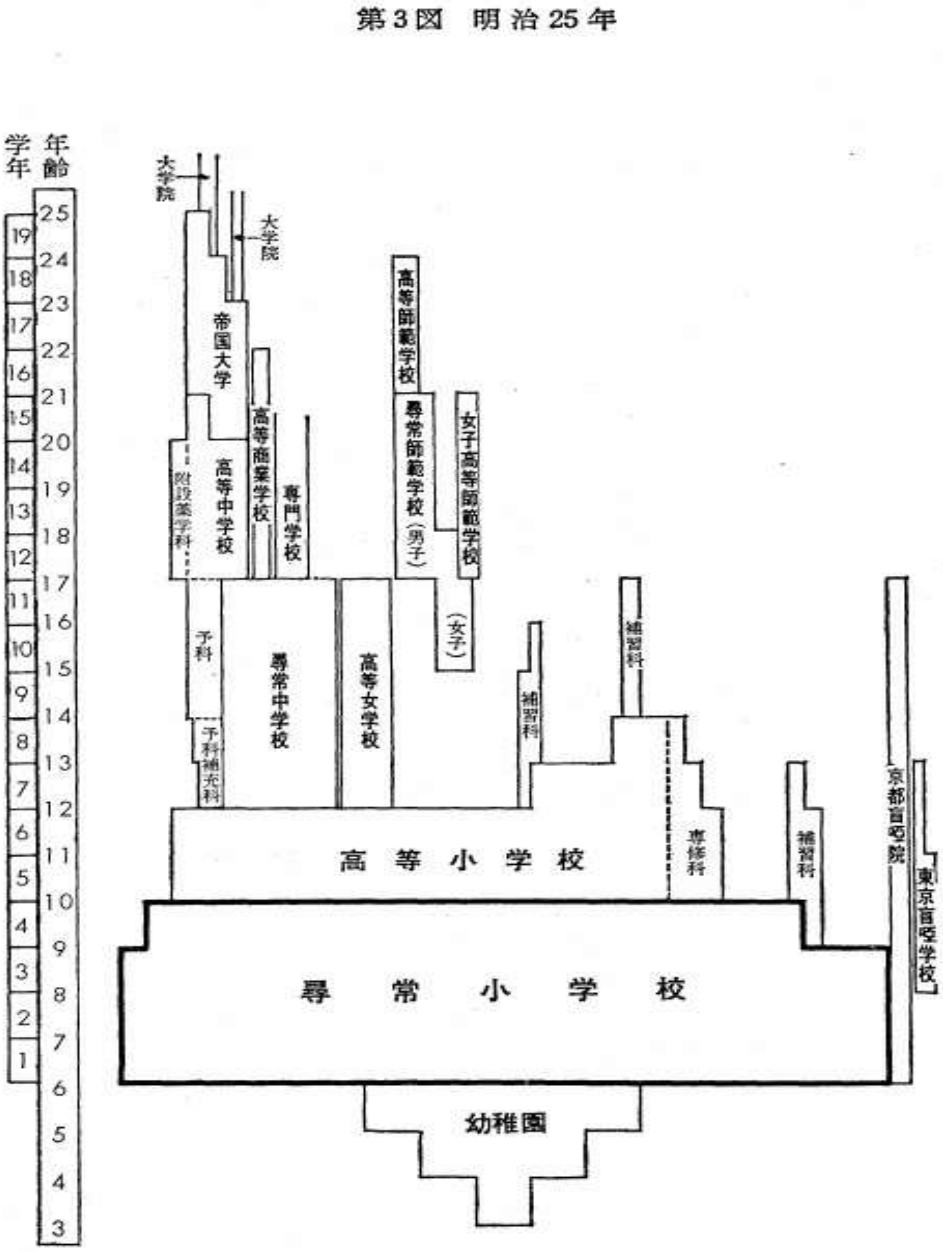
	年。1886 年（明治 19）に設置され，94 年に旧制の高等学校となる。[4] 現在では高校 3 年生～大学 2 年生にあたる。
尋常師範学校	各府県には講習所，養成所などの速成養成機関が設置されたが，75 年前後から漸次府県立の師範学校として再編統合され，東京の男女両師範学校を除く官立師範学校をも吸収，81 年師範学校教則大綱，83 年府県立師範学校通則によって本格的な小学校教員養成機関として整備された。86 年師範学校令を制定，師範学校を高等，尋常に二分し，各府県に小学校教員養成のための尋常師範学校(年齢 17 歳以上，修業年限 4 年)を確立。順良，信愛，威重の 3 気質を目標とした画一的な教育内容や兵式体操の導入，学資支給制，卒業後の服務義務の制，全寮寄宿制による生活規制などにより，独特な人物重視の教育を実施することとなった。[5] 現在だと高校 3 年生～大学 3 年生にあたる。
高等師範学校	旧制で、中学校・高等女学校・師範学校の男子教員を養成した国立学校。高師。[6] 現在では大学 4 年生～24 歳にあたる。

[4] 出典：Weblio 辞書　「高等中学校」
http://www.weblio.jp/content/%E9%AB%98%E7%AD%89%E4%B8%AD%E5%AD%A6%E6%A0%A1　2015.1.9

[5] 出典：コトバンク　「尋常師範学校」
https://kotobank.jp/word/%E5%B0%8B%E5%B8%B8%E5%B8%AB%E7%AF%84%E5%AD%A6%E6%A0%A1-1343747　2015.1.9

[6] 出典：コトバンク　「高等師範学校」
https://kotobank.jp/word/%E9%AB%98%E7%AD%89%E5%B8%AB%E7%AF%84%E5%AD%A6%E6%A0%A1-62890　2015.1.9

図１　学校系統図[7]



ここからは修学旅行のはじまりについて述べていく。文献を読みはじめると、「遠足」というワードが頻繁に出てきた。そのため、修学旅行の原型は遠足にあるのだと考えて調べ

7　出典：文部科学省　「学校統計図」
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318188.htm　2015.1.9

てみると、やはり修学旅行の前身は長途遠足であった。遠足も修学旅行もともに課外授業であり校外授業的要素のある行事で、長距離の集団移動という点で共通している。『日本の教育課題第 5 巻　学校行事を見直す』では、「兵式体操の隊列運動もまた「遠足」の淵源の一つにあげてもよい[8]」と述べているし、修学旅行の中でも兵式体操を実施しているため、関連性は見受けられる。よって、修学旅行は遠足から派生して出来た校外学習の 1 つだと考えられる。

次に、修学旅行の原型である「長途遠足」について詳しくみていく。以下は、『日本の教育課題第 5 巻　学校行事を見直す』から引用する。

> 修学旅行の原型は、1886（明治 19）年 2 月に東京師範学校で実施された長途遠足であるとされる。この長途遠足は、前年の 5 月に文部省から兵式体操を実施するように示達があったことと関連して、「軍行旅行を為すべしとの議が起つた」ことに由来する。このときは房総地方を銚子港方面に軍行旅行を行った。【資料Ⅲ‐267】によれば、その旅行に際して「本校教育の趣旨に鑑み」て「学術研究を目的とする旅行の趣意を兼ねしむるを以て適当と認め」たという。水原克敏は、高嶺秀夫校長がこうした軍隊的な学校管理に賛同していなかったために、あえて抵抗したのであろうと推察している（水原克敏『近代日本教員養成史研究』）。軍行に学術研究の要素が含まれたということで「修学旅行の嚆矢」であると書かれているが、修学旅行の名称を冠したのは、翌 1887（明治 20）年 3 月に修学旅行についての規定を定めたことに始まる（【資料Ⅲ‐267】）[9]。

上記の引用文の「【資料Ⅲ‐267】」とは下記の資料である。

> 【資料Ⅲ‐267】
>
> **東京師範学校における軍行旅行（修学旅行）の創始**
>
> 東京師範学校　1885（明治 18）年・1886（明治 19）年
>
> 明治十九年二月　始めて軍行旅行を実施す。是より先、十八年五月、文部省より、試に兵式体操を実施すべき旨の示達ありしを以て、体操伝習所と協議し、其の方法

8　佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.395
9　佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.396

を研究して実際に之を試み、初は課外として之を施行したが、其れの方法漸く整ひ、教具亦次第に備はるに及んで、兵式体操を正課の一に加へた。同時にまた軍隊に倣って軍行旅行を為すべしとの議が起つたが、本校教育の趣旨に鑑み、兵式による軍行に於ても、学術研究を目的とする旅行の趣意を兼ねしむるを以て適当と認め、適宜日数を定め、諸学科の教員、之を引率することゝし、この月始めて千葉県銚子港方面に之を試みた。[10]

整理してみよう。1885（明治 18）年に文部省より兵式体操を実施せよとの通達を受け、その方法を研究し実行することになり準備をすすめた。その後、兵式による旅行でも学術研究も兼ねることを適当とし、日数や引率教員を定め、1886（明治 19）年 2 月に千葉県銚子港方面に軍行旅行を行った。つまり、修学旅行のルーツはこの軍行旅行からきたものである。

次に、上記でみた軍行旅行の詳細についてみていく。以下は、「修学旅行ドットコム」という「公益財団法人全国修学旅行研究協会」が開設しているウェブサイトからの引用である。

「長途遠足報告書」の中に、高嶺秀夫校長はその主旨について「今日本校ニ於テ始メテ生徒ヲシテ長途ヲナサシメラレタルハ一ハ兵式操練ヲ演習セシメ、一ハ実地ニ就テ学術ヲ研究セシムルノ目的ニ出ツ」とあり、12 日間、99 名、銚子方面へ鉄砲を携帯して徒歩遠足をした。発火演習、散兵演習、学術演習として起床調査、介類[11]採集、作図、写景、学校参観等をした。その実習報告書により、概略を述べてみよう。「生徒は軍装で各銃器及び背嚢に外套・毛布をつけ、数部の兵書と靴、靴下、シャツの着替え等数品を携帯した。教員は学術研究のため、寒暖計、バロメートル、ドレッジ、トロール植物採集函、搾葉紙、アルコール瓶、写真版、図画器械、地図等を携行した。これらの器械及び弾薬は 2 台の車に積み運搬した。道路進行中、生

10　1885（明治 18）年　東京師範学校『東京師範学校における軍行旅行（修学旅行）の創始』（佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.434 所収）による

11　おそらく魚介類だと思われる。魚介類は魚類及び貝類、エビ、カニだけでなく、甲羅のないイカ、タコ、ウニ、ナマコなども含めた水産物全般（ワカメなどの海藻は除く）の総称　出典：NHK 放送文化研究所　「魚介類？魚貝類？」
http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/kotoba/term/071.html　2014.12.16

徒はすべて兵式に従い、まず生徒総員を 3 小隊の 1 中隊に編成、日々中小学[12]第 2 級生徒に順番でその半分を小隊長、分隊長にし、中隊長、小隊長は兵式教員が担当した。また毎日一人ずつ、沿路各村について人口戸数、学校数すべて教育と兵事に関する諸事項を調査させ、軍行日記を作らせた。今回巡行した地は千葉一県内である。本年 2 月 15 日東京を出発、習志野練兵場に滞在 2 日、佐倉、成田、佐原を経て銚子に至り、八日市場、東金、千葉を経て、同月 25 日に帰京した。」[13]

図 2　明治 19 年　東京師範学校の長途遠足の道のり[14]

また、同サイトに掲載している経歴大略に記述してある 1 日の移動距離によると、15 日の移動距離は約 5 里 29 丁（約 22.796 キロメートル）、18 日は約 7 里 6 丁（約 28.143 キロ

12　原文ママである。名称なのか等不明。
13　出典：修学旅行ドットコム　「明治時代～戦前の修学旅行の意義」
http://shugakuryoko.com/museum/rekishi/museum4000-02.pdf　2015.1.9
14　出典：修学旅行ドットコム　「明治時代～戦前の修学旅行の意義」
http://shugakuryoko.com/museum/rekishi/museum4000-02.pdf　2014.12.23

メートル)、19 日は約 6 里 15 丁(約 25.197 キロメートル)、20 日は約 9 里 28 丁(約 38.395 キロメートル）を移動している。(　) 内は、1 里を 3,927 メートル、1 丁を 109 メートルとし、筆者がキロメートルに換算してつけたものである。この軍行中に初日で全生徒の約 1/3 が足を痛め、途中で帰校させることもあった。また散兵演習や軍行演習、森林攻撃等の演習も行っており、この訓練は午前 7 時から午後 4 時まで行っている。図 2 は長途遠足の道のりを記したものである。

次に日本ではどのようにして修学旅行が正式に実施されたのかをみていく。以下、『日本の教育課題第 5 巻　学校行事を見直す』から引用する。1886（明治 19）年の東京師範学校における軍行旅行についての資料である。

> 今日広く行はるゝ修学旅行の嚆矢である。翌二十年三月修学旅行の期を定めて
> 第一　七月十六日より九月十日までの中三十日以内
> 第二　十二月二十日より同三十日までの中
> 第三　三月十五日より同三十日までの中　　時宜により執行
> 第四　毎月一回　土曜日　一泊以下
> とし、此の規定に基づき、同年八月六日より九月四日に至るまで一箇月に亘る長途修学旅行を為さしめ、生徒をして銃を肩にし剣を帯びしめ、酷暑を犯して信甲駿相の山地を跋扈せしめた。但し明治二十一年以後は必ずしも規定の如く之を行はず、次第に其の方法を改むるに至つた。[15]

この資料は 6 ページで利用した「【資料Ⅲ - 267】」の続きである。ここでは、修学旅行を行う時期について、春季・夏季・冬季の長期休暇、また毎月 1 回 1 泊以下という規定を記している。

こうした規定に基づいて実施された「修学旅行」という名の旅行があった。それは、高等師範学校で 1887（明治 20）年 8 月から 9 月にかけて行われたものである。

この規定に基づいて、東京師範学校の後裔である高等師範学校では、1887 年 8 月

15　1885（明治 18）年　東京師範学校『東京師範学校における軍行旅行（修学旅行）の創始』（佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.434 所収）による

6 日より 9 月 4 日まで「修学旅行」を実施した。これが「修学旅行」と銘打った最初のものであろう。その実態については、新谷恭明「日本最初の修学旅行の記録について」(『九州大学大学院教育学研究紀要』第 4 号、2002 年）に、この修学旅行に参加した生徒の日記が紹介されている。これによれば上野から汽車で横川駅まで移動した後、軍行が始まる。浅間山の登山、千曲川河畔での演習、甲府での学校巡視や葡萄酒工場の見学、日蝕の観察、富士登山、生物採集などの「修学」を随時実施しつつ群馬、長野、山梨、神奈川と軍行旅行をなし、箱根にしばし滞在した後、小田原を経て最終日に国府津から汽車で新橋に戻り帰校するというものであった。軍行であるから、「途次小学生徒ノ出迎アルカ又ハ人家周密ノ市街地等ヲ通過スルトキハ我々一同ハ是ニ答フルニ厳整ノ姿勢ヲ改ムルニアリテ端然銃ヲ肩ニシ歩ヲ喇叭ニ和ス」と、人目のあるときは威儀を正して軍行を行っていたが、人目のない「常時ハ随意ノ姿勢ニテ歩行シ得ルナリ」と臨機応変に対応していた。但し、高等師範学校では軍行旅行から修学旅行へ転換した 1887（明治 20）年の年末には「生徒の一泊以上の軍行は、夏冬両季休業中、及び春期試験の後に限り、これは学術研究旁々することとして、兵式体操の用具を携帯せしめず」として、「修学旅行と軍行旅行とを分離し、修学旅行は専ら学術の研究を目的とし、最高学年に於いて、または特に必要のある場合に之を行ひ、軍行旅行は近郷における発火演習、数日間の長途軍行等、全て軍隊に准じて之を行った」（東京文理科大学・東京高等師範学校『創立六十年』）と、修学旅行と軍行旅行を区分して行うようになった。修学旅行には修学旅行としての意味が確立されるようになったのである。[16]

少しまとめておこう。東京師範学校の後身である高等師範学校では 1887 年 8 月 6 日から 9 月 4 日まで修学旅行を実施した。名称は修学旅行であるが、中身は軍行であった。軍行であるため、出迎えがある場合や市街地では姿勢を正し銃を肩にしてラッパを吹いていたが、人目のない場所では普通に歩くなど臨機応変に対応していた。これが日本で行われた「修学旅行」と銘打った最初のものになる。

また、高等師範学校では同じ年の年末に、修学旅行は学術研究を目的とし、最高学年または特に必要のある場合において行うこと、軍行旅行は近場で発火演習、数日間の長途軍行など全て軍隊に則って行うとし、修学旅行と軍行旅行を区別して行うことに決めた。そ

[16] 佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.397

して生徒の一泊以上の軍行を行う際には、夏冬両季休業中と春期試験の後だけにし内容は学術研究を主として行い、兵式体操の用具（銃など）を携帯しないとして、修学旅行と軍行旅行を分離した。

どうやら「軍行」に始まった「修学旅行」だが、その当時から「軍行」だけではなく、学習の色合いが濃い、まさしく「修学」の旅行へと発展する兆しが見えるのである。しかし、次で見ていくように、二つの方向は簡単に分離してくことはない。

第２節　修学旅行の普及

第 2 節では、その後どのようにして全国に普及したのか、どのような教育方針であったのかをみていく。以下、『日本の教育課題第 5 巻　学校行事を見直す』から引用する。

> この高等師範学校ではじまった「修学旅行」はたちまち各地の尋常師範学校に伝播していく。東京府尋常師範学校では 1887（明治 20）年 11 月に「修学及兵式体操演習」に二泊の軍行旅行を申請しているし（【資料Ⅲ－268】）・【資料Ⅲ－270】）、文部省も「男生徒ノ修学旅行ヲ施行シ以テ地理ヲ探究シ動植物ヲ採集シ実地写景及ヒ発火演習等ヲナサシムルハ府県ノ慨子挙行スル所ニシテ其ノ生徒ニ益スルコト少ナカラスト云フ」と、学術研究と軍事演習とを複合させた修学旅行の試みが、師範教育において高い意義を持つと評価し、修学旅行が教育的に有効である旨を報告している（【資料Ⅲ－269】）。そして 1888（明治 21）年に制定された尋常師範学校設備準則に、修学旅行についての記述が登場するようになり（【資料Ⅲ－271】）、「修学旅行」は法的な根拠をもつ学校行事としての位置を確保したのである。[17]

高等師範学校で行われた日本で最初の修学旅行を皮切りに、その後尋常師範学校にひろがっていった。文部省も学術研究と軍事演習の二つが師範教育に高い意義があると評価し、「修学旅行」は法的な根拠をもつ学校行事となった。上記の引用文（　）内の資料についてみていこう。

【資料Ⅲ－271】

尋常師範学校ノ修学旅行ニ関スル規定

17　佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.397

文部省　1888（明治 21）年

〔略〕

〇修学旅行ハ定期ノ仕業中ニ於テ一ヶ年六十日以内トシ可成生徒常食費以外ノ費用ヲ要セサルノ方法ニ依リテ之ヲ施行スヘシ

〔略〕[18]

上記の引用文は、修学旅行について文部省の定めた最初で唯一の法制規定である。内容としては、修学旅行は 1 年のうち 60 日以内とし、生徒に食費以外の費用をかけさせないようにする、というものである。

こうして修学旅行は師範学校から広まったが、その後師範学校以外にも普及していく。以下、『日本の教育課題第 5 巻　学校行事を見直す』から引用する。

かくして修学旅行は師範学校に端を発したが、すぐに師範学校以外の諸学校にも普及していった。尋常中学校、高等小学校など男子の中等教育機関において師範学校同様に行軍に史跡見物、自然観察などの要素を取り入れた修学旅行が実施されていくようになる（【資料Ⅲ－273】・【資料Ⅲ－274】）。文部省としては、修学旅行が「其身体及精神ヲ鍛練スルト共ニ知見ヲ広メシメンコトヲ務ムヘシ」という教育的効果を見出しており（【資料Ⅲ－276】）、殊に師範学校については、生徒の費用面や教員の旅費についても配慮するようになっていた（【資料Ⅲ－275】・【資料Ⅲ－279】）。また、修学旅行が師範学校のみならず、中等以上の諸学校に普及していった結果、修学旅行を行政の管理下におく動きも見られた（【資料Ⅲ－277】・【資料Ⅲ－278】）。こうした配慮や監督は、修学旅行が学校行事として社会的に認知されてきたことを示している。[19]

師範学校以外にも広がりをみせた修学旅行は、尋常中学校や高等小学校などの男子の中等教育機関に広がった。ただし上記の引用文によれば、高等師範学校のようには修学旅行と軍行旅行がきっちり分離されておらず、修学旅行の中に行軍も含まれているようである。そして行軍を含む史跡見物や自然観察などを取り入れて実施されていくようになる。文部

---

[18]　1888（明治 21）年　文部省『尋常師範学校の修学旅行に関する規定』（佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.436 所収）による

[19]　佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.398

省は、「身体と精神を鍛練すると共に知識を得、見聞を広めることに務めよ」いう教育的効果を見出した。

次に上記の引用文で用いられている資料についてみていく。

【資料Ⅲ－273】

最初の修学旅行

大阪尋常中学校　1888（明治 21）年

「本校一覧（二四年)」（五頁）には、

廿一年五月、全校生徒戎装シ大和地方へ修学旅行ヲナシ、畝傍山、初瀬ヲ経テ多武峯ニ於テ対抗運動ヲナシ吉野山ニ至リ、七泊シテ帰ル、爾後春秋二季ヲ以テ長途旅行ヲナスヲ例トス、

とはじめて「修学旅行」という言葉が出てくる。

明治初期には遠足・修学旅行などの学校行事はほとんどなく、本校史でも、博物場見学などを除けば生徒が校外行事に出かけて行くような話は出てこなかった。

だが、ここで旅行が行われるようになったといっても、今日の修学ないし研修旅行や遠足とは大いに違っていた。「戎装」すなわち武装しての行軍旅行であり、かつ「対抗運動」すなわち軍事演習としての模擬戦をなしつつ吉野山まで徒歩で行くものであった。

この旅行の想い出もまた、寺崎留吉が書いている。

武装行軍も行はれ重い背嚢に「スナイドル」銃を担いで大和の畝傍、多武峯、吉野まで五日間も靴で歩き通しました。或日、石川先生は足が疲れて、和装で駕籠に乗って、隊の傍を尻目に笑ひ乍ら通られた。其でも一人も不平は唱へなかった。[20]

上記の引用文から、大阪尋常中学校での修学旅行は 1888（明治 21）年 5 月が最初とされる。しかし物見遊山のようなものではなく行軍での旅行であり、銃を担ぎ軍事演習である模擬戦をしつつ吉野山まで向かうものであった。

以上のように師範学校のみならず、師範学校以外にも広がっていった。しかしまだ軍行旅行の色が強く、現代のような観光目的のものとは程遠い内容のものである。

---

[20]　1888（明治 21）年　大阪尋常中学校『最初の修学旅行』（佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.438 所収）による

第 3 節　軍行から物見遊山へ

1890（明治 31）年ごろになると、修学旅行は学術研究の部分が大きくなっていく。第 3 節では、その変容についてみていく。以下、『日本の教育課題第 5 巻　学校行事を見直す』から引用する。

> 一方、修学旅行はその「学術研究」の部分をふくらませ、さらに交通機関の発達がその性格に変化を与えるようになり、当初の意義とは別の形で定着してきた。1899（明治 32）年に修学旅行に際しての汽車運賃の割引を要望する声に対して、逓信次官から官設汽車運賃の割引について回答があり、修学旅行生のために鉄道等の運賃割引の措置がはかられるようになった（【資料Ⅲ－282】）。汽車運賃の割引は、修学旅行の教育的意義に対する配慮で始まったものであるが、現在の「学割」制度の嚆矢でもある。当初は人数の多寡による割引であったが、1913（大正 2）年の鉄道院通知では、これに距離も加味する割引率が定められている（【資料Ⅲ－307】）。[21]

修学旅行は学術研究の部分をふくらませたため、徒歩で移動することが必須にはならなくなった。そのため交通機関を使用するようになり、汽車運賃の割引を要望することに繋がったと考えられる。またここで「学割」という言葉が登場するが、これが日本で初めての学割制度であり、発端である。鹿児島県私立教育委員会の協議で定められた学割の内容は、以下の通りである[22]。表 1 では 12 歳以上の学割、表 2 では 12 歳未満の学割についてである。また、読みやすさを考慮して漢数字を算用数字に改めた。

表 1　　年齢 12 歳以上の場合

50 人以上 150 人未満	2 割 5 分引
150 人以上 300 人未満	3 割 5 分引
300 人以上	5 割引

[21]　佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.398

[22]　1899（明治 32）年　文部省・通信省『学校生徒修学旅行の際官設輝堂運賃について（「学割のはじまり」）』（佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.443 所収）による

表 2　　年齢 12 歳未満の小児の場合

50 人以上 200 人未満	2 割 5 分引
200 人以上 400 人未満	3 割 5 分引
400 人以上	5 割引

このように学術研究の部分をふくらませたことにより、軍行旅行の要素は薄くなっていった。興味深いことに上記引用文の続き[23]によると、交通機関の発達で修学旅行からは行軍要素がなくなっていったのである。行軍による移動よりも、汽車などによる移動によって行動範囲は広くなり、修学旅行で得られる見聞も広がったのである。そのため、多くの学校では、修学旅行の趣旨は行軍による身体・精神の鍛練よりも「修学」の要素が強くなり、集団での旅行という非日常の学校行事は物見遊山という方向に変わっていったのである。

このように修学旅行に修学や物見遊山の要素が強まっていく中、修学旅行について反感を持つ人々も出てきた。以下、『日本の教育課題第 5 巻　学校行事を見直す』から引用する。

> このように汽車による移動、旅館への宿泊、不要な金銭の浪費など、行軍に端を発した修学旅行の目的が失われてしまっていることに対して、苛立ちを感ずる意見も出てきているし（【資料Ⅲ－284】）、修学旅行不要論も登場するようになってきた（【資料Ⅲ－291】）。また、通常の学資の中に、修学旅行の費用も組み込まれているようにもなってきた（【資料Ⅲ－287】）。
>
> 〔中略〕
>
> また、一部の人間だけしか行けないような「修学旅行」は好ましくないという指摘は、逆に「修学旅行」が学校全体で取り組む行事となっていたことを意味している。さらに、「修学旅行」は子どもの体力面から低学年では無理があるとの判断が示されたり」ということが記されており、行軍旅行が持っていた鍛練の側面はかなり薄くなっていった（【資料Ⅲ－294】）。

[23] 佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.398

修学旅行に対して苛立ちを感じている内容の資料[24]を見ると、修学の要素が強くなれば費用がかかる、足を使って歩くからそこ自らの筋肉や精神を鍛えられる、汽車に乗れば家にいるのと同じであり何も得られるものはない、この修学旅行では修学上・健康上共になにも得られるものはない、と酷評している。しかし、この後も行軍の要素は薄くなっていき、修学の要素が大部分を占めるようになった。

また、交通機関の発達によって修学旅行の性格が変わるとともに、旅行先が国外へと変わっていった。台湾割譲、南満州鉄道の開設、韓国併合といった日本のアジアへの勢力の拡張と植民地化の動きに伴い、日本の対外的野心は大きくふくらむこととなった。そうした中、1906（明治 39）年、東京高等師範学校、東京府師範学校、広島高等師範学校が満韓地方に修学旅行を行っている。そのため、台湾や韓国でも鉄道料金や宿泊料金の割引の措置が講じられた。

第 4 節　戦争の影響

本節では、戦争中の修学旅行についてみていく。以下、『日本の教育課題第 5 巻　学校行事を見直す』から引用する。

> 戦時色が強くなってくると、修学旅行にも影響が出てきた。まず、旅行に割く日数に制限が加えられ、目的も「単ナル見学旅行」ではなく、「鍛練品性ノ陶冶」をめざすものという方向に限定されるようになり、そうした行政的な指示が行われた（【資料Ⅲ－333】・【資料Ⅲ－334】・【資料Ⅲ－338】）。そして、1943（昭和 18）年には事実上旅行は禁止されることになる（【資料Ⅲ－342】）。実際、1940（昭和 15）年の松本市三尋常小学校では、参宮旅行が実施され（【資料Ⅲ－335】）、戦時中に行われた開智国民学校初等科の直江津旅行では遊びの要素が消え、参宮と海洋訓練に目的が移っていったし（【資料Ⅲ－343】）、前述のように鍛練遠足のような心身鍛練に重きを置いたものに変わっていったのである（【資料Ⅲ－336】・【資料Ⅲ－339】・【資料Ⅲ－341】）。[25]

---

[24]　1900（明治 33）年　教育時論 561 号『修学旅行に就きて』（佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.443 所収）による

[25]　佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.401

戦争色が強くなってくれば、さすがに修学旅行も物見遊山のような内容ではなくなっていった。引用文で挙げている【資料Ⅲ－334】[26]によると、

・修学旅行は単なる見学旅行ではなく、集団勤労であり野外演習であって、心身の鍛練や品性を養うような旅行に限る

・中等学校・青年学校は 3 日以内、小学校・各種学校は 1 日とするが、演習等の訓練のために同地に宿営する必要がある場合はこれに限らない

としており、戦争がきっかけで修学旅行はまた行軍の要素を強めたものに逆戻りしたのである。その後事実上修学旅行自体が禁止されることになり、修学旅行は一時的に姿を消すことになった。

第 2 章　戦後から現代へ

第 1 節　戦後の再開

第 1 節では、戦後、どのようにして修学旅行か再開されたのかをみていく。以下、『日本の教育課題第 5 巻　学校行事を見直す』から引用する。

> もとより修学旅行は、行軍に端を発するものであったが、戦後もまた身体的訓練を伴う形で復活する。【資料Ⅲ－344】では、1947（昭和 22）年に開智小学校で復活した美々原登山旅行に関するものである。名称は修練遠足であったが、基本的に戦前に実施されていた鍛練遠足の再開でもあった。目的も「社会科、自然科の観察研究と兼ねて心身の練磨の為め」と、高等師範学校が修学旅行を開始したときと目的は変わっていないと言えよう。[27]

修学旅行は 1947（昭和 22）年に再開された。引用文の【資料Ⅲ－344】[28] によると、長野県松本市開智国民学校が 6 年生の登山を実施したものが敗戦直後の修学旅行であるとしている。登山の目的は、「社会科　自然科の観察研究と兼ねて心身の練磨の為め、」であり、期日は同年 9 月 28 日、29 日の 2 日間であった。引率者は 6 名で、児童数は 6 年生男

---

[26]　1940（昭和 15）年　福島県学務部『生徒児童の旅行に関する件』（佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.558 所収）による

[27]　佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.402

[28]　1947（昭和 22）年　長野県松本市開智国民学校『敗戦直後の修学旅行－美々原登山』（佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.581 所収）による

女合計で 150 名であった。しかし、この届出をした修学旅行は実施されず、翌月 10 月にもう一度願い出て 10 月 5 日、6 日の 2 日間で行われた。10 月の修学旅行では、目的地は同じで、人数は児童が 5 人減った 145 人で実施された。この修学旅行は、小学校として宿泊を伴う学校行事を計画し、実行した最も早い事例とされている。

次に修学を主とする修学旅行が出てきた事例についてみていく。以下、『日本の教育課題第 5 巻　学校行事を見直す』から引用する。

> しかし、社会見学を旨とする修学旅行は、【資料Ⅲ－345】にある高島小学校の清水・三保旅行のような形で再開された。但し、戦後新たに設置された教科である社会科学習の一環として位置づけられていることが、戦後再開された修学旅行の特徴である。【資料Ⅲ－348】は、福島県赤井第一小学校の 1952（昭和 27）年の「修学旅行の栞」、【資料Ⅲ－349】は、同じ福島県の石城郡の小学校の 1954（昭和 29）年の「修学旅行のしおり」であるが、学習において社会科のみならず、動物園での動物学習や駅名をローマ字で書かせたり、小遣い帳を付したり、総合的な学習課題が盛り込まれている。[29]

修学旅行の修学を主とする旅行は、長野県諏訪市高島小学校が 1948（昭和 23）年から開始したものが最初とされている。引用文の【資料Ⅲ－345】[30] によると、旅行の目的も、「太平洋および日本の景観にふれ綜合学習をする。」としており、行軍旅行と違い汽車を利用している。また、1950 年代になると、動物園や博物館等に見学を行ったり電車やバスを使用しており、軍行旅行の要素はかけらもなくなっている。

このように修学旅行は進化を遂げているが、修学旅行についての問題も次第に浮き彫りになってくる。以下、『日本の教育課題第 5 巻　学校行事を見直す』から引用する。

> また、文部省も修学旅行についていろいろと指示を出している。まずは団体旅行は集団で食事を共にするため、集団食中毒に関する注意を出したり（【資料Ⅲ－347】・【資料Ⅲ－350】）、事故や計画性、生徒のしつけなどについての通達を出していたが（【資

29　佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.402

30　1948（昭和 23）年～1973（昭和 48）年　長野県諏訪市高島小学校『長野県諏訪市高島小学校における修学旅行の変遷』（佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.581 所収）による

料Ⅲ－351】)、1955（昭和 30）年 4 月 4 日付で「小学校、中学校及び高等学校の修学旅行等について」という通達を発し、修学旅行に対する文部省の基本的な姿勢を示した（【資料Ⅲ－352】)。しかし、この通達からほぼ 1 ヶ月後の 5 月 11 日、宇高連絡船紫雲丸が貨車航走船第三宇高丸と衝突し、乗り合わせていた修学旅行の小学生が多数死亡した。さらに 5 月 14 日岩手でバスの転落事故があり、やはり修学旅行児童が死亡するという惨劇が起きたのである。こうした影響を受けて、先の通達にさらに追加注意事項が通達された (【資料Ⅲ－353】･【資料Ⅲ－354】)。そして、文部省は翌 1956（昭和 31）年、『修学旅行の手びき』を編纂して配布した。修学旅行に関するノウハウの集大成したもので、この後の日本の修学旅行計画のマニュアルとなったものである（【資料Ⅲ－355】)。[31]

1950 年代半ばになると修学旅行に関する様々な事故が起きるようになっていった。そのため、事故防止を目的とした「修学旅行の手びき」[32]を文部省が配布した。

ここで、引用文にもあった海難事故である汽船紫雲丸機船第三宇高丸衝突事件についてみていく。以下は、海難審判所の「汽船紫雲丸機船第三宇高丸衝突事件」というウェブサイトを参考にしていく。

汽船紫雲丸汽船第三宇高丸衝突事件とは、1955（昭和 30）年 5 月 11 日午前 6 時 56 分に宇高連絡客船の紫雲丸（総トン数 1,480 トン）と宇高連絡貨物船の第三宇高丸（総トン数 1,282 トン）とが、濃霧の中で香川県高松沖合において衝突した事件である。　当日紫雲丸は、午前 6 時 40 分船客 781 人と貨車等 19 両を載せて高松を出航し、約 10 ノットの全速力で岡山県宇野に向かい、一方、第三宇高丸は、午前 6 時 10 分貨車 18 両を載せて宇野を出航し、約 12.5 ノットの全速力で高松に向かっていた。紫雲丸右舷船尾に第三宇高丸船首が前方から約 70.度の角度で衝突し、その結果、紫雲丸は沈没し、船客 166 人及び船長ほか乗組員 1 人が溺死又は行方不明となり、船客 107 人及び乗組員 15 人が負傷し、第三宇高丸は船首部に損傷を負った。

多数の旅客を輸送する大型連絡船の海難で、死傷者の数が多かったこと、死亡した船客の多くが婦人や子供、修学旅行の生徒達であったこと、レーダーという最新式の航海機器

31　佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.402

32 1956（昭和 31）年　文部省『修学旅行の手びき』（佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.630～638 所収）p. 630～638 にほぼ全体が収められている

を装備した船舶間の事故であったことなどから、社会に与えたショックは大きなものがあった。写真 1、写真 2 は沈没した紫雲丸を引きあげた際の写真である。

写真 1　引き上げられた紫雲丸[33]

写真 2　引き上げられた紫雲丸[34]

この事件の他にも死傷者が出る大きな事件事故から、些細なトラブルまで大小様々な問題が発生していた。これらの問題を解決すべく、「修学旅行の手びき」を編集して配布したのである。「修学旅行の手びき」とは、1956（昭和 31）年に文部省が配布したものである。本書は戦争以後の経験を継承総括したもので、この後の日本の修学旅行計画のマニュアルとなったものである。内容としては、教育的意義や修学旅行の計画・管理、事故防止についてなど、細かく分類され記述されている。

第 2 節　修学旅行の進化

本節では、修学旅行専用列車についてみていく。以下、『日本の教育課題第 5 巻　学校行事を見直す』を参考にしていく。

33　出典：海難審判所　「汽船紫雲丸機船第三宇高丸衝突事件」
http://www.mlit.go.jp/jmat/monoshiri/judai/30s/30s_siun_3ukoui.htm　2015.1.10
34　同上

1950 年代には修学旅行専用列車も登場する。大人数で旅行に行く際、貸切臨時列車で旅行した記録は以前にもあった。その方が安全であり、教育効果も上がる。これを更に一歩進めて修学旅行専用列車が作れたら輸送面では理想的な姿となる。そのことが真剣に取り上げられた動機となったのは、国鉄の協力を得て 1958（昭和 33）年の春に東京の広尾中学校を主体とした「モデル修学旅行列車」であった。これが極めて好評だったため同年 6 月、国鉄では明石、姫路間に修学旅行生専用電車を提供した。これがまた非常に好結果を得たため、学校間において修学旅行専用電車を建造する話が持ち上がったのである。その結果、表 3 のように専用電車や船が新設された。表の内容については「修学旅行ドットコム」という「公益財団法人全国修学旅行研究協会」が開設しているウェブサイトを参考にして作成した。

表 3　新設された専用電車・船

年度	名称	区間
1962（昭和 37）年度	近畿・東海地区児童修学旅行専用電車・近鉄「あおぞら号」	大阪・名古屋～宇治山山田間運行
〃	近畿地区修学旅行専用船・関西汽船「わかば丸」	神戸～別府間運航
1963（昭和 38）年度	東北地区修学旅行専用気動車「おもいで号」	秋田・盛岡～東京間運行
1964（昭和 39）年度	関東地区専用電車「ひので号」	東京～京都間運行
〃	近畿地方専用電車「きぼう号」	大阪～東京間運行
〃	九州地区専用気動車「とびうめ号」、専用船・関西汽船「ふたば丸」	別府～神戸間運航
1965（昭和 40）年度	関東地区第 2 専用電車「わかくさ号」	東京～京都間運行
〃	近畿地方第 2 専用電車「わかば号」	大阪～東京間運行

図 4　専用列車「ひので号」[35]

図 5　専用列車「なかよし号」[36]

このように専用電車・船が建造されているが、この誕生により乗車中における事故、身体障害が著しく減少している。京都で、あるバスガイドが「専用列車で来られた生徒さんの顔には疲れが出ていない。車中で居眠りをしている生徒さんも少ない」と言っていた[37]ことがあったが、この言葉だけでも専用電車、列車がいかに必要であったかが窺える。

第 3 節　海外への修学旅行の登場

本節では、海外への修学旅行についてみていく。以下、『日本の教育課題第 5 巻　学校行事を見直す』から引用する。

1980 年代に入ると、国際化に伴って海外に修学旅行の行き先を求めるところも出てくる。そのことにより、海外での事故やトラブルが問題となってくるが、新たな教育的義務もまた出てきたと言える。文部省が海外での修学旅行中の安全確保について出した通達を挙げておく（【資料Ⅲ－364】～【資料Ⅲ－366】）[38]

国際化に伴い増加した海外修学旅行についてみていく。どれくらいの数の学校が修学旅

35　出典：修学旅行ドットコム　「思い出の修学旅行」
http://shugakuryoko.com/museum/omoide/index.html　2015.1.11
36　出典：修学旅行ドットコム　「思い出の修学旅行」
http://shugakuryoko.com/museum/omoide/index.html　2015.1.11
37　1964（昭和 39）年　秋田貞男『修学旅行専用列車の開始』（佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.639 所収）による
38　佐藤秀夫・寺崎昌男『日本の教育課題　第 5 巻　学校行事を見直す』p.402

行で海外に行ったのだろうか。以下は、「修学旅行ドットコム」という「公益財団法人全国修学旅行研究協会」が開設しているウェブサイトを参考にし、実際どのくらいの学校が海外へ行ったのかみていこう。

文部省は 1988（昭和 63）年 3 月 18 日と 1989（平成 1）年 12 月 13 日に 1986（昭和 61）年度及び 1988（昭和 63）年度の高校国際交流等の状況調査結果を発表した。海外修学旅行の実施は、1988（昭和 63）年度：134 校 28,940 人（内公立 8 校 1,732 人）、1988（昭和 63）年度 204 校 50,728 人（内公立 22 校 4,562 人）であり、公立高校の海外修学旅行が急増したことが分かる。行き先も韓国、中国、アメリカ、オーストラリアに及んだ。ちなみに公立高校最初の韓国修学旅行は、1984（昭和 59）年度実施の福岡県立小倉商業高等学校、公立高校最初の中国修学旅行は、1988（昭和 63）年度の埼玉県浦和市立高校である。

第 4 節　修学旅行の今

本節では、修学旅行の現在について明らかにしていく。以下は、『文部科学統計要覧』と「修学旅行ドットコム」という「公益財団法人全国修学旅行研究協会」が開設しているウェブサイトを参考にしていく。

ここでは、平成 24 年度の全国公私立高等学校の海外修学旅行実施状況をみていく。下記の表は実施校数と参加生徒数の割合である。生徒総数は 3 学年分であるため、生徒総数を 3 で割り、その人数を総数とする。また、今回は国立校を除外し、割合と生徒総数は小数点第二位以下を四捨五入して算出した。

表 4　2012（平成 24）年度の公私立高等学校の
海外修学旅行の実施校数と参加生徒数の割合

	学校数			生徒数		
	総数（校）	実施数（校）	割合（%）	総数（人）	参加数（人）	割合（%）
公立	3,688	347	9.4	776,034	51,954	6.7
私立	1,319	480	36.4	339,630	82,222	24.2
合計	5,007	827	16.5	1,115,648	134,176	12.0

（『文部科学統計要覧』、「平成 24 年度全国公私立高等学校海外修学旅行実施状況」により筆者作成）

学校数をみると、公立校は実施率が 9.4%と 1 割にも満たないが、一方で私立校は 36.4%となっている。生徒数は公立校が 6.7%、私立校が 24.2%となった。こうしてみるとやはり公立校に比べ私立校は海外修学旅行を行っていて、私立校は海外修学旅行が多いという世間のイメージ通りの結果であった。実施校よりも参加人数の割合が低いのは、海外修学旅行は実施しているが、一部の学科（英語科や国際科等）のみが行っているという事例があるからかもしれない。しかし海外修学旅行は自分の予想としては、公立校私立校共にもっと浸透していると予想していたが、思いのほか実施率が低いことに意外性を感じた。

訪問国については、東南アジア（主にシンガポール、フィリピン）、北アメリカ、韓国、ヨーロッパが大部分を占めている。また、ごく少数ではあるが、中東、中南米、モンゴルにも訪問している。

次は国内修学旅行についてみていく。以下、「週刊観光経済新聞」のウェブサイトを参考にする。このサイトは日本の観光やそれに伴う経済について述べているサイトである。

平成 24 年度の調査では、国内修学旅行の実施率は公私立合わせて 87.0%だった。修学旅行で重点を置く活動は、遺跡・史跡・文化財・寺院等の見学、平和学習、伝統的町並みや建造物群保存地域の見学がトップ 3 であった。また、体験学習については 4,5,6 位を占めているため、歴史・平和学習の次点で重きを置いている活動である。その影響か実施校の 6 割がマリンスポーツやスキー等の体験学習を行っており、教育的に大きな期待を抱いている。旅行先としては、沖縄、京都、東京がトップ 3 にランクインしている。歴史や平和学習には京都・東京、体験学習には沖縄・5 位の北海道と、国内修学旅行では納得のいく旅行先ではないだろうか。

おわりに

本論文では、修学旅行の歴史と変遷について論じてきた。この論文を作成していく過程で、ふと自分の修学旅行はどうだっただろうか、と思い出してみた。

私の出身高校である米沢中央高校は私立高校であり、スポーツが盛んな高校である。私立高校は公立高校に比べ、海外修学旅行を行う場合が多く、私の友人の私立高校出身者でも海外修学旅行を行ったという人が大半だった。しかし、私の高校は国内修学旅行で、行き先は広島、京都、大阪、奈良であった。その理由は、学校長の教育方針が「世界を知る

前にまずは自国である日本についてしっかりと学び、理解しなくてはならない」というものであったからである。実際、私自身海外よりも京都に行ってみたいという気持ちがあったため、特に残念に思ったりはしていなかったが、周りの友人達は海外がよかったと愚痴を漏らしていたのを覚えている。

旅行日程は4泊5日で1日1県のような形で行っていた。内容としては、広島では原爆ドーム、大阪ではユニバーサルスタジオジャパン、奈良では東大寺等の寺社仏閣、京都では班別行動でまた寺社仏閣の見学と、歴史と平和学習についてが大半を占めていた。しかし、やはり修学旅行といえば校外学習の中でも一番のビッグイベントであるから、歴史、平和学習もそこそこに友達とはしゃぎ楽しむ方が大きかった記憶がある。ユニバーサルスタジオジャパンでもパーク自体楽しかったのもあるが、友人たちと遊ぶということが楽しかった印象がある。

修学旅行は元は軍行旅行であり、現在のように学習や観光、娯楽の要素はなかった。もし今現在でもそのような形で修学旅行が残っていたとすれば、どうなっていたのかは見当がつかないが、生徒からすれば絶対に行きたくない行事の1つになっていたのではないだろうか。修学旅行を軍行から学術研究にシフトチェンジしてくれたことに感謝したいと思う。

今回修学旅行について論じてみたが、学生時代には必須行事として言われるままに行事に参加するだけであったから、このような歴史があることは全く知らなかったし興味すら持っていなかった。しかし修学旅行は、他の歴史についてもそうだが、先人たちが受け継ぎ、失敗し、改良してくれているおかげで今現在よりよい形になっているのであると実感した。だが、まだ改善点があるのも実情だ。旅行先での問題行動やモラル、事件や事故など様々な問題点が存在する。それらを改善し、より安全に、より正しい形で行うためにどのように行っていくのかが重要な課題である。

最後に、協力してくれた友人たち、最後まで指導して下さった三原先生に心から感謝を申し上げたい。

参考文献

・佐藤秀夫　寺崎昌男『日本の教育課題　第5巻　学校行事を見直す』東京法令出版、2002

・文部省　『文部科学統計要覧　平成 25 年版』　文部省、2013

参考サイト

・修学旅行ドットコム　「明治時代～戦前の修学旅行の意義」
http://shugakuryoko.com/museum/rekishi/museum4000-02.pdf　2014.12.23
・修学旅行ドットコム　「修学旅行の改善向上と全修協の発足・活動」
http://shugakuryoko.com/museum/rekishi/museum4000-04.pdf　2015.1.11
・修学旅行ドットコム　「平成 24 年度全国公私立高等学校海外修学旅行実施状況」
http://shugakuryoko.com/chosa/kaigai/2012-03-joukyou1.pdf　2015.1.11
・NHK 放送文化研究所　「魚介類？魚貝類？」
http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/kotoba/term/071.html　2014.12.16
・Weblio 辞書　「尋常小学校」
http://www.weblio.jp/content/%E5%B0%8B%E5%B8%B8%E5%B0%8F%E5%AD6%E6%A0%A1%E3%80%80　2015.1.9
・Weblio 辞書　「高等小学校」
http://www.weblio.jp/content/%E9%AB%98%E7%AD%89%E5%B0%8F%E5%AD%A6%E6%A0%A1　2015.1.9
・Weblio 辞書　「尋常中学校」
http://www.weblio.jp/content/%E6%97%A7%E5%88%B6%E4%B8%AD%E5%AD%A6%E6%A0%A1　2015.1.9
・Weblio 辞書　「高等中学校」
http://www.weblio.jp/content/%E9%AB%98%E7%AD%89%E4%B8%AD%E5%AD%A6%E6%A0%A1　2015.1.9
・Weblio 辞書　「尋常師範学校」
https://kotobank.jp/word/%E5%B0%8B%E5%B8%B8%E5%B8%AB%E7%AF%84%E5%AD%A6%E6%A0%A1-1343747　2015.1.9
・Weblio 辞書　「高等師範学校」
https://kotobank.jp/word/%E9%AB%98%E7%AD%89%E5%B8%AB%E7%AF%84%E5%AD%A6%E6%A0%A1-62890　2015.1.9

・文部科学省　「学校統計図」

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318188.htm　2015.1.9

・海難審判所　「汽船紫雲丸機船第三宇高丸衝突事件」

http://www.mlit.go.jp/jmat/monoshiri/judai/30s/30s_siun_3ukoui.htm　2015.1.10

・週刊経済観光新聞　「高等学校の国内修学旅行の実態」

http://www.kankokeizai.com/tokusyukiji/school15/14.pdf　2015.1.12